資料紹介

『一年間の早稲田生活より得たる感想』

解題

『探偵小説四十年』は、江戸川乱歩の探偵小説の歴史であると同時に、自伝的な性格も持った本である。しかし、のちに乱歩となる青年平井太郎の、大学時代に関する記述は意外なほど少ない。「高等学校の入学試験を受けようとしていたとき、父の破産に会い、当時は苦学の困難であった官立学校を思いとどまって、それの可能な私学を志したのだが…」と簡潔に記されている。

乱歩が自ら作成したスクラップブック「貼雑年譜」ではこの間の事情が少し詳しい。明治四十五（一九一二）年三月愛知県立第五中学校を卒業するが「コノ時父ノ家ガ破産シタノデ、第八高等学校ノ受験票マデ受取ツテキタノヲ捨テ、父ト共ニ朝鮮ニ渡リ、馬山ノ父ノ旧友ノ家ノ居候トナツテ一、二ケ月ヲ過シタガ、ヤハリ学業ヲツヾケルコトヲ希望シ、父ノ許シヲ得テ、苦学ノ覚悟デ上京シタ。」とあり、卒業して朝鮮に渡ったものの、すぐに上京したことがわかる。

その年（改元して大正元年）八月に上京した乱歩は、早稲田大学の予科に編入する。翌年には大学部へと進んだ。専門は経済学であった。

池袋に落ちつくまでの乱歩の前半生は、引越しの連続であったことはよく知られる。大学時代の乱歩も職と住居を転々としていた。「貼雑年譜」を見ると、上京した大正元年八月から、大学卒業の大正五年七月まで、十一カ所に住んでいる。

本を購入する金銭的余裕のない乱歩は、図書館で本を読むことになる。早稲田大学の図書館に加えて、「上野と日比谷では洋書を、大橋図書館では翻訳ものを猟った」。

この時期の乱歩の読書のうち、探偵小説に関する部分は、手製の本『奇譚』へとまとめられることになる。少年時代に読んだ黒岩涙香の再読から始まり、大正三年（大学二年）には「初めてポー及びドイルを読み、短篇探偵小説の妙味を知る」。

しかし乱歩は自分の進路を探偵小説家と決めていたわけではない。はじめは政治学志望であったが、大学では経済学を専攻する。この時期の文章は「貼雑年譜」では「『大学時代』ノ袋ニアリ」とあるが「ECONOMICS」と書かれた封筒がそれにあたる。この袋は大学時代に書いたものを集めたもので、経済学や欲望に関する文章あるいはメモが入っている。

この「一年間の早稲田生活より得たる感想」だが、これも「ECONOMICS」と書かれた封筒に入っていた資料のひとつである。十八字×十行の原稿用紙に筆で書かれている。一枚目の欄外には「五十嵐力先生評点」とあり、題の上に赤字で八〇とあるのが点数であろう。

一枚目の「格言」の「言」抜けた部分と、「宇宙」の「宙」の部分は赤で修正されている。一枚目から二枚目にかけての第二段落には赤で傍線が引かれた箇所がいくつかある。そして、原稿の末尾には「文にしっかりした所があり、又味もある」という評価が書かれている。

五十嵐力は早稲田大学の教授として、明治末から長期にわたり教壇に立ち、のち文学部長もつとめた人物である。『文章講話』『新国文学史』などの著書があり、古典文学と修辞学の研究に多大な業績を残す。明治七年生まれの五十嵐は、三十代の終わりで、代表的著作となる『新国文学史』を刊行したばかりであった。

ちなみに現存する乱歩の蔵書には五十嵐の著作は『平安朝文学史』（上・下）がある。しかしこれは「日本文学全史」としてまとめて購入されたもののようで、読んだ形跡は見られない。五十嵐の文学観が乱歩にどう影響したかは不明である。

五十嵐力は文学科の教授であったが、そのころ予科でも教鞭をとっており、おそらくこの作文は、乱歩の予科の時期に書かれたものではないかと思われる。

「一年間の早稲田生活より得たる感想」というタイトルではあるが、内容は「活溌なる精神は健康なる精神に宿る」ということばをめぐってのものになっている。身体が精神をつくるのではなく、精神が身体をつくるのではないか、という主張である。

学生時代の作文でもあり、それほど過大視する必要はないにしても、乱歩がのちに身体と精神との関係にこだわった小説を書くことや、あるいは「不健全派」と区分されることになることなどを考えれば、興味深い資料であるとは言えるのではないかと思う。

落合　教幸
（立教大学大学院　博士後期課程）

『一年間の早稲田生活より得たる感想』

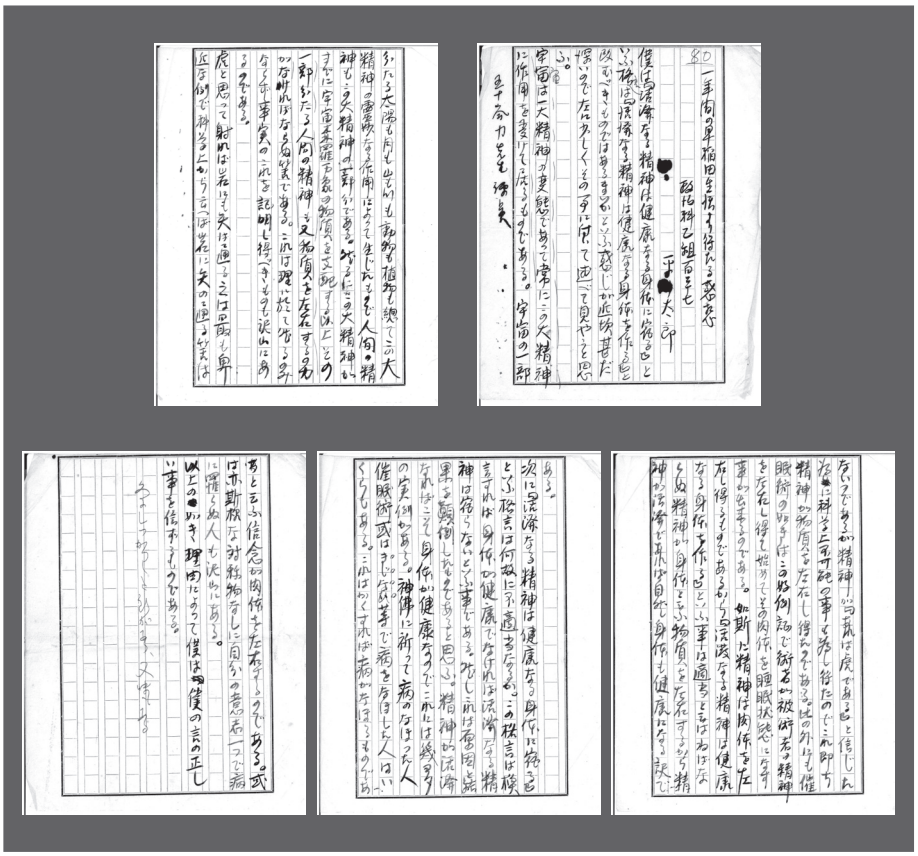
政治科乙組 百二十七
平井太郎

僕は『活溌なる精神は健康なる身体に宿る』といふ格言は『活溌なる精神は健康なる身体を作る』と改むべきものではあるまいかといふ感じが近頃甚だ深いので左に少しくその事に付いて述べて見やうと思ふ。

宇宙は一大精神の変態であって常にこの大精神に作用を受けて居るものである。宇宙の一部分たる太陽も月も山も川も動物も植物も総てこの大精神の霊妙なる作用によって生じたもので人間の精神もこの大精神の一部分である。然るにこの大精神がすでに宇宙森羅万象の物質を支配する以上その一部分たる人間の精神も又物質を左右するの力がなければならぬ筈である。これは理に於て然るのみならず事実のこれを証明し得べきものも沢山にあるのである。

虎と思って射れば岩にも矢は通る之は最も卑近な例で科学上から云へば岩に矢の通る筈はないのであるが精神が『あれは虎である』と信じた為■に科学上不可能の事も為し得たのでこれ即ち精神が物質を左右し得たのである。此の外にも催眠術の如きはこの好例証で術者が被術者の精神を左右し得て始めてその肉体を睡眠状態になす事が出来るのである。如斯に精神は肉体を左右し得るものであるから『活溌なる精神は健康なる身体を作る』といふ事は適当と云はねばならぬ精神が身体と云ふ物質を左右するから精神が活溌であれば自然身体も健康になる訳である。

次に『活溌なる精神は健康なる身体に宿る』といふ格言は何故に不適当なるか。この格言は換言すれば身体が健康でなければ活溌なる精神は宿らないといふ事である。然しこれは原因と結果を顛倒したものであると思ふ。精神が活溌なればこそ身体が健康なのでこれには幾多の実例がある。神佛に祈って病のなほった人催眠術或はまじなひ等で病をなほした人はいくらもある。これはかくすれば病がなほるものであると云ふ信念が肉体を左右するのである。或は亦斯様な対称物なしに自分の意志一つで病に罹らぬ人も沢山にある。

以上の■如き理由によって僕は僕の言の正しい事を信ずるものである。

文にしっかりした所があり、又味もある